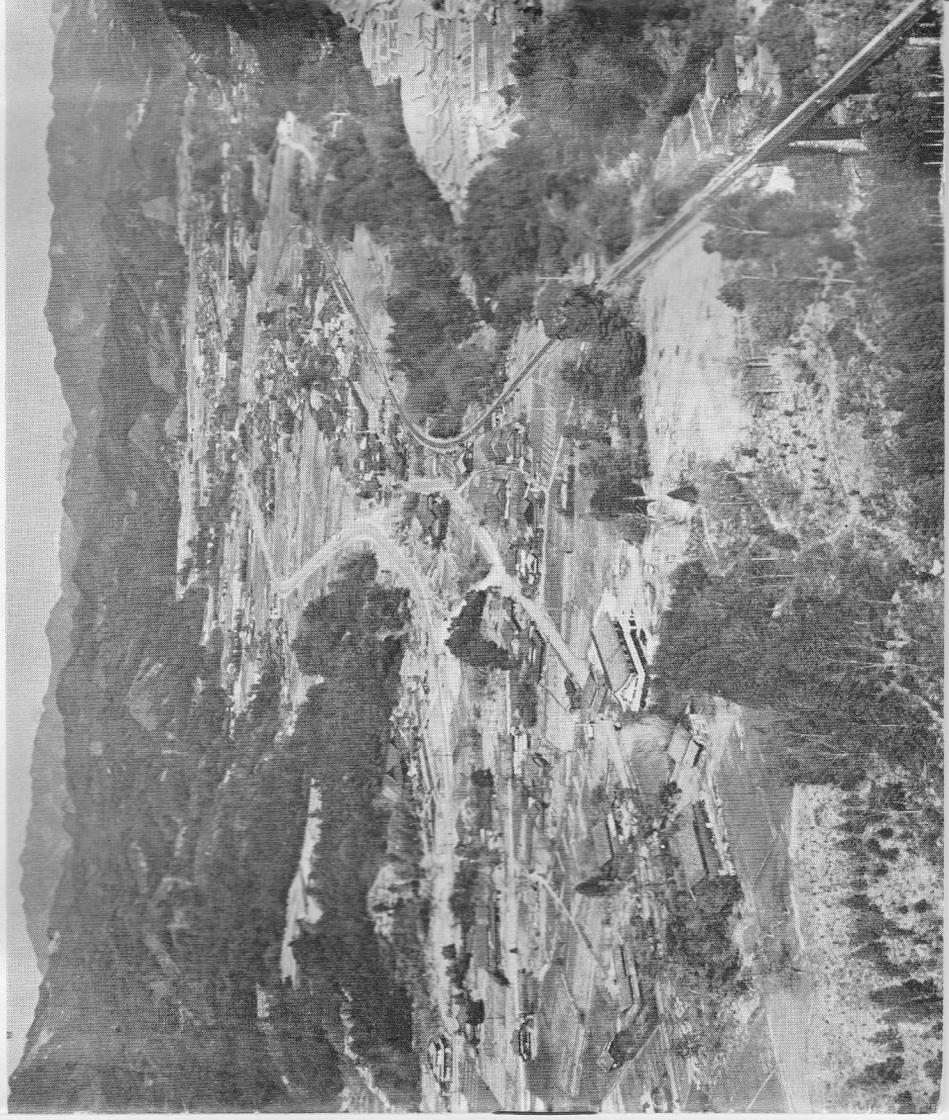


長篠の史跡

長篠城趾付近



城の沿革

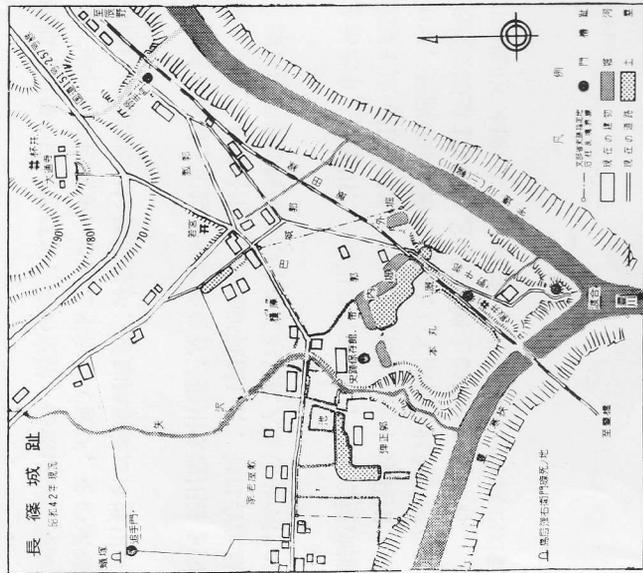
長篠城は永正5年(1508)菅沼元成が築いたもので、はじめ今川氏に属し、ついで徳川氏に服し、元亀2年(1571)五代目の正貞(正定)の代に武田氏に属し、天正元年(1573)からは徳川氏が戦い取って、松平景忠を城主とした。

天正3年(1575)2月、遠三地方の情勢が危険になったので、家康は当時21才の奥平貞昌(後の信昌)を城主とした。

貞昌は武田勝頼が率いる大軍に包囲されたが、よくこの城を死守し、織田、徳川連合軍大勝の機会をつくった。天正4年、この城が陥止となり、信昌が新城に移り住むまで、約70年、戦国争乱の渦中にあった。

長篠城は、面積約10ヘクタールで、北に向かって扇形に開き、本丸、帯郭、巴城郭、弾正郭、野牛郭、瓢郭、家老屋敷にわかれていた。その後、城郭の旧形は一部分崩されたけれども、貴重な遺構は今なお見ることが出来る。

長篠城趾の重要部分が、昭和4年12月、国の指定史跡になった。昭和19年帯郭趾に、長篠城趾史跡保存館が設立された。



戦の意義

元亀3年12月、武田信玄は浜松城の徳川家康を三方原におびき出して破り、翌天正元年三河に入り、野田城を取ったが、病を得て、甲州に引返す途中病死した。

その子勝頼は、父の志をついで上洛を決意し、天正2年、足助、明智、高天神の諸城を陥れ、大いに自信を得て、天正3年には長篠城を囲んだ。

高天神城の時、信長の救援が間に合わずして落城した。長篠城も家康にとっては、武田領への前進基地である。高天神城の二の舞をくり返すことは出来ない。急ぎ信長に救援を求めた。

織田・徳川連合軍は、全力を注いで設楽原に進出し、武田軍をおびき出して一丈戦闘を展開した。秀吉、家康時代の勇将名士は、ほとんど全部この戦に参加していた。

この戦は、攻城と野戦を兼ねたもので、西軍は、はじめて3,000挺という当時としては極めて大量の鉄砲を巧みに使って、1日で勝敗を決し、従来の戦術を一変させた。

武田軍は信将の大部分を失って、決定的打撃をこうむり、織田・徳川の制覇は絶対的なものになった。若し、勝頼が信将の意見を採用していただたら、日本の歴史は大きく変わっていたであらう。まさに関ヶ原の戦にも匹敵する重大な戦であった。



← 本丸跡

本丸の跡は約0.34ヘクタールの平地で、その東端、この写真で樹木が茂って見える所に、土塁と堀が昔のままの姿を残している。本丸は本城ともいい、この土塁を大土居と呼んだ。

戦のあらまし

永祿3年、今川義元が桶狭間に斃れ、徳川家康が独立すると、山家三方衆(長篠の菅沼・田峯の菅沼・作手の奥平)は家康に属したが、元亀2年には武田氏に降伏し、三方原や野田城の戦には、武田勢として徳川勢と戦った。

天正元年、武田信玄が三河から去ると、家康は長篠城を攻めた。城主菅沼正貞は城を明け渡して退き、長篠城は家康の手に帰した。作手の奥平(貞能、その子貞昌)は武田氏に叛き、家康についた。

血染の陣太鼓

長篠の戦の折、奥平貞昌が使ったもので、大鼓はその時の血で染まっている。戦場では一人が背負い、一人がこれを打って進んだものであろう。

奥平家の家宝として保存されていたが、昭和84年、鳳来町へ寄贈された。



攻城戦

- 城方……兵数合計500人 主将＝奥平貞昌
副将＝松平景忠（瓢郭を守る） 副将＝松平親俊（弾正郭を守る）
武田勝頼は甲斐、信濃、上野の兵を率いて長篠城を囲んだ。
- 天正3年5月
- 東軍の配陣

兵数合計	15,000人
(大通寺山)	2,000人
(天神山)	2,500人
(寒狭川左岸)	2,000人
(篠場野)	1,500人
(有海村)	1,000人
(医王寺山)	3,000人
(医王寺山後)	2,000人
(鷲ヶ巢山及びその支墨)	1,000人

• 5月8日から東軍は連日攻撃したけれども、城兵はよく防いだ。

- 11日の暮れ方、篠場野の東軍は、寒狭川に竹のいかだを浮べ、渡合より野牛郭にせまがつが退けられた。
- 某日、東軍は本丸の西隅から穴を掘って城に入ろうとしたが、城内からも穴を掘り銃撃したので退いた。
- 13日、東軍は糧庫を奪おうとして、瓢郭の西北を攻め死者800人を出して退いた。貞昌は瓢郭の障壁が大いに破損したのを見て、この兵を本丸に引きあ

殿 井

本丸の東で一段低い所を野牛郭という。野牛郭の本丸に接した所に、殿井と呼ぶ泉があつて、城兵の飲料水になっていた。河岸までは30mほどあり、安全な位置にある。



げた。この夜、東軍は望楼を構え、城中を見下ろそうとしたので、城兵は異風筒(巨銃)を放って、これを撃ちくたいた。

- 14日、東軍は総攻撃したが城兵は死守して落城しない。以後、東軍は長囲の策を採った。この夜、城中では軍議を開き、貞昌の密命をおんだ鳥居強右衛門は、夜半、ひそかに重囲を脱して岡崎に走った。
- 15日明け方、強右衛門は寒峯山に登って煙をあげ、脱出成功の合図とし、岡崎に至り、家康・信長に城中の急を告げた。
- 16日、強右衛門は寒峯山で再び煙をあげ、城兵に援軍が来る事を知らせ、夜に至り城中に入ろうとして捕えられた。――援軍は来ぬから早く降伏せよ――と、城内に向かつて呼ばれと、すすめられ、いつわって承諾した。
- 17日、強右衛門はしばしば城門につれていかれ――援軍はすでに一宮、本野ヶ原に到着したぞ――と、呼ばったので、篠場野で磔殺された。



鳥居強右衛門磔死の碑

鳥居強右衛門は豊川市の生まれである。天正3年5月14日夜半、野牛郭の不浄口から出て、豊川に張られた鳴子の網を破り、河伝いに4キロ程下ってから上陸した。

使命を果たして、再び城に入ろうとしてとらえられ、城の向かい、篠場野(新城市有海)で磔になった。行年36才。写真はそこに建てられた碑である。

強右衛門の働きは城兵を救い、西軍の勝因となり、その責任感是人々に深い感動を与えた。

野 戦

- 信長は13日岐阜を立ち、14日岡崎に着き、16日牛久保城に入り、三遠諸将の質子を収め、17日野田城に着いた。
- 18日、西軍は設楽原に至り、諸軍の部署を定めた。
- 19日、東軍は医王寺山で軍議を開いた。その結果、馬場信房ら宿将の意見が通らず、東軍は寒狭川を渡って、設楽原に出撃することになった。
- 20日、東軍は寒狭川を渡り、諸隊の部署を定めた。信長は東軍が策略に乗って設楽原に進撃するのを見て、設楽原で軍議を開いた。
- 21日(太陽暦7月9日)未明、酒井忠次の鷲ヶ巢山奇襲により戦の幕は切れて落とされ

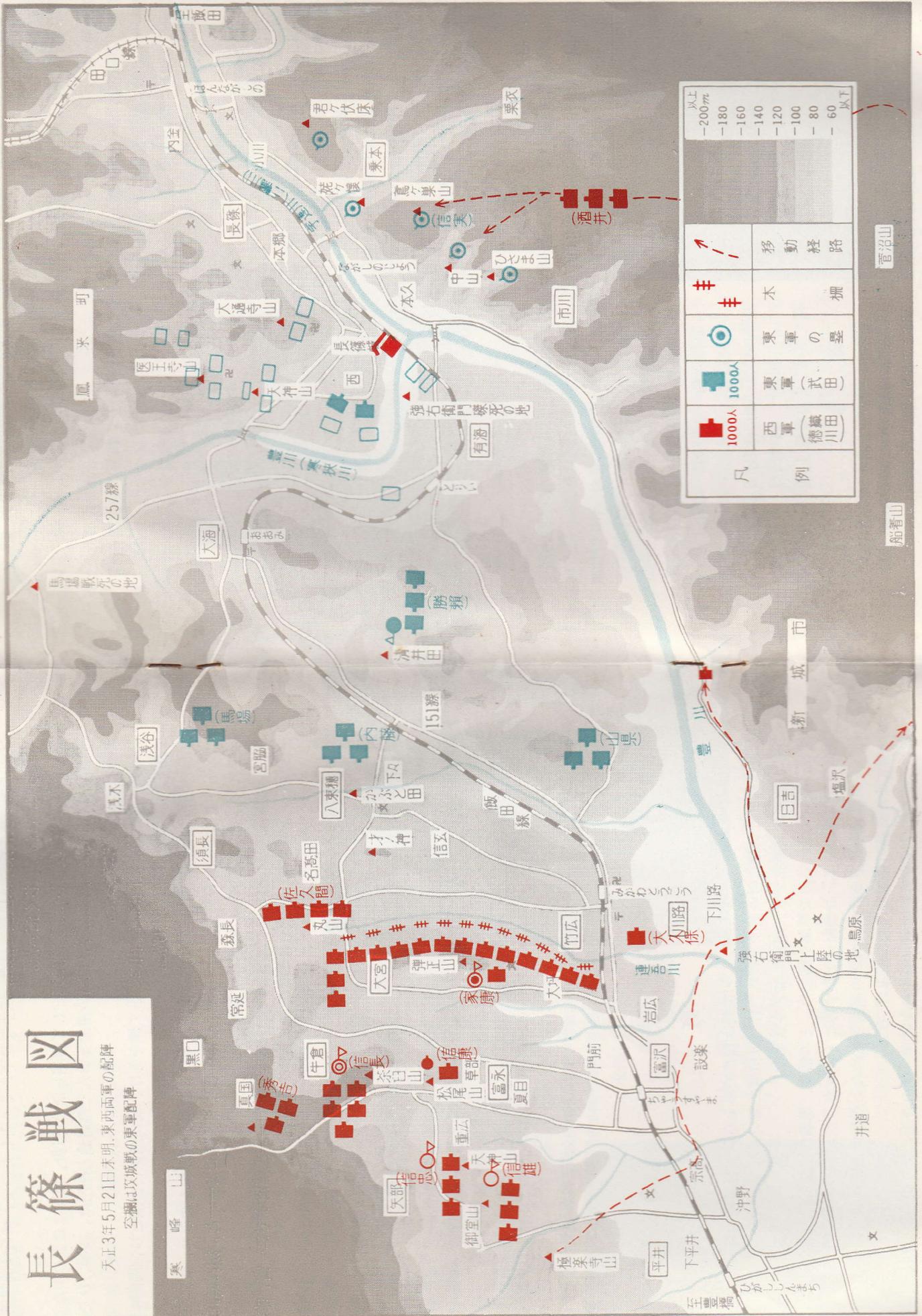
長篠戦図

天正3年5月21日未明、東西両軍の配陣

空欄は攻城戦の東軍配陣

寒峰山

以上	移動経路	沿山
-200m	柵	沿山
-180	木	沿山
-160	東軍の塁	沿山
-140	東軍(武田)	沿山
-120	西軍(徳川)	沿山
-100	凡例	沿山
-80		沿山
60		沿山
JKT		沿山



勝頼の退却

午後になって、東軍の陣営は動揺はじめたが、勝頼は容易に退かない。馬場信房は勝頼に退却をすすめ、自らは殿戦を引き受けて西軍の追撃を支え、勝頼の姿が遠く見えなくなつてから引き返して奮戦し、出沢付近で敵に首級を与えた。

甲州へ落ちゆく勝頼に従う者は僅かに4人であった。信濃路にはいった所へ、長篠城攻撃を諫めて、勝頼の怒りに触れた老將、高坂正宣が800騎を引きつけて出迎えたので、無事甲州に入ることが出来た。



← 馬場信房の墓

馬場信房は極力、設楽原攻撃を諫止した。然しそれは容れられなかった。戦は不幸にして信房が予想した通りになり、信玄以来、生死を共にしてきた山県も内藤も討死した。

信房の武田氏への最後の願いは、せめて、勝頼が無事甲州へ着く事であった。潮のように押しよせる西軍を食いとめ、食いとめ、漸く勝頼の退路はひらけた。

出沢の丘で、各將信房は鋭才の生涯を終わった。写真は城の西方、寒狭川左岸にある信房の墓である。

戦後

・信長は近畿の攻略に忙しく、家康は三河では足助、作手、田峯、武節の諸城を、遠江では二俣、諏訪原、光明山の諸城を陥れたが、高天神城は容易に抜けず、駿河の攻略も容易に進まなかった。

・勝頼の勢力は次第に衰え天正10年3月その子信勝と共に織田勢に追いつめられて、天目山の麓で滅びた。信長もまたその年の6月本能寺の変に斃れた。

火おんどり →

新城市の信玄部落にある信玄塚は、長篠の戦で戦死した西軍の屍を埋めた所である。その年の6月、ここから大群の蜂が出て、通行人を苦しめたので、大法要を営んだと諸書に記されている。

以来、この付近の人々が、毎年、盆の盂の火踊りをして、その霊をなぐさめている。



た。設楽原の戦は前半は東軍が優勢であったが、3,000挺の鉄砲の威力の前にもろくも潰え勝頼は敗走した。信長は深追いするのを戒め、午後3時戦闘は終わった。

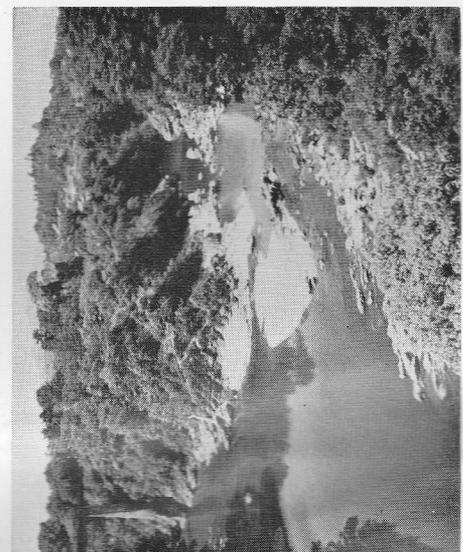
・この戦で東軍の死傷1万余人、西軍の死傷もまた6,000人を下らなかったという。

・西軍の配陣

- 徳川勢………兵数合計 8,000人
- (弾正山) 徳川家康
- (松尾山) 徳川信康
- (連吾川右岸) 大久保忠世 本多忠勝 榊原康政 石川數正 平岩親吉 鳥居元忠 内藤家長
- (鷹ヶ巣奇襲隊) 酒井忠次
- 織田勢………兵数合計 30,000人
- (茶臼山) 織田信長 柴田勝家
- (天神山) 織田信忠 河尻秀隆
- (御堂山) 北畠信雄 稲葉一鉄
- (本宮東方高地) 佐久間信盛 池田信輝 丹羽長秀 滝川一益 水野信元 安藤範俊 蒲生氏郷 森長可 羽柴秀吉 その他近畿の兵
- (鉄砲隊) 佐々成政 前田利家

・東軍の配陣………兵数総計 15,000人

- 右翼隊 (浅木付近) 3,000人
- 穴山信君 馬場信房 真田信綱 真田昌輝 土屋昌次 一条信竜
- 中央隊 (清井田付近) 3,000人
- 武田信廉 内藤昌豊 原昌胤 安中景繁 和田業繁 西上野の諸士
- 左翼隊 (清井田南方高地) 3,000人
- 武田信豊 山県昌景 小笠原信嶺 松岡右京 菅沼定直 小山田信茂



跡部勝資 甘利信康 小幡信貞

小幡信秀

総予備隊 (有海西方) 3,000人

武田勝頼 望月信雅 武田信友

武田信光

長篠城監視 (城の西方) 2,000人

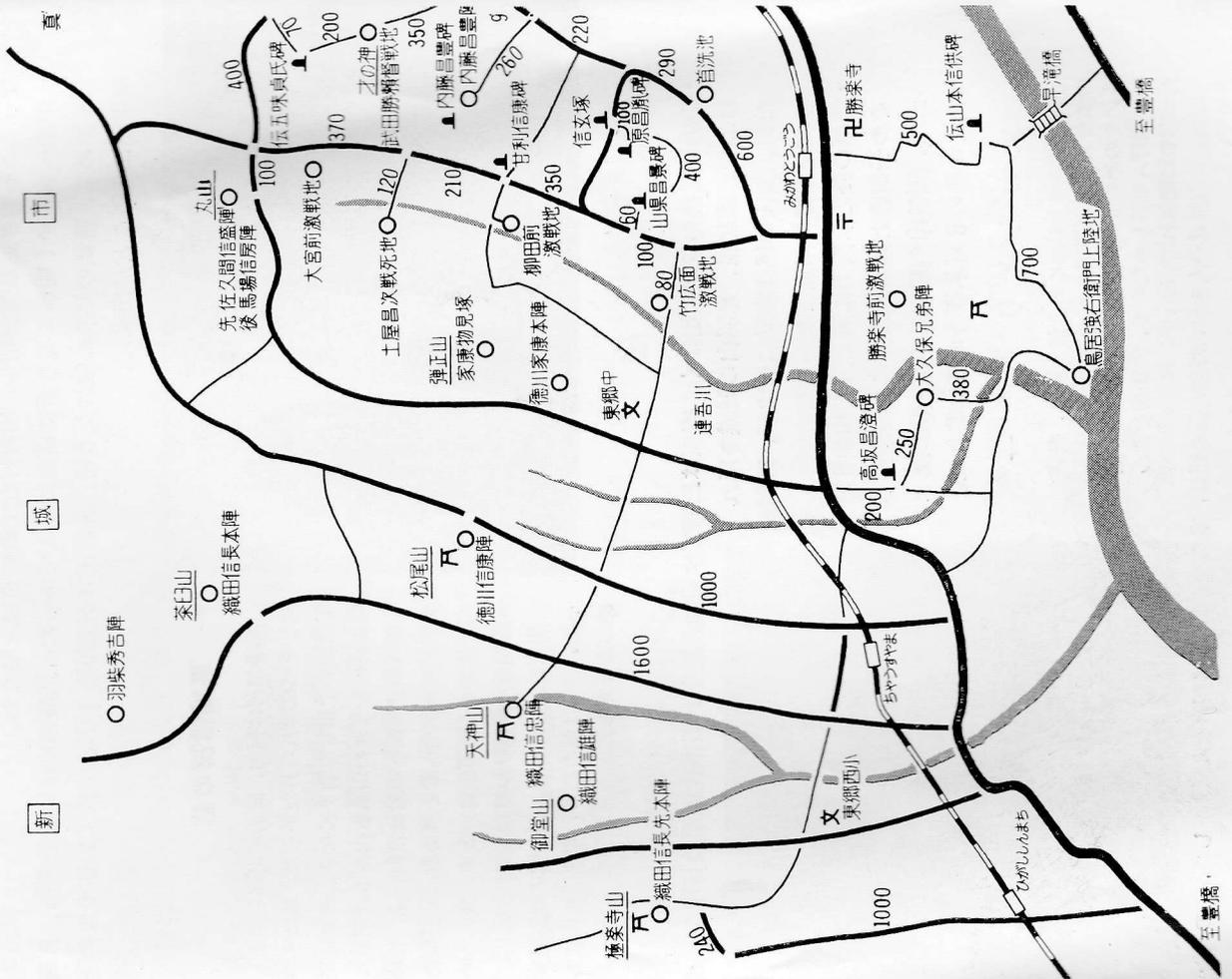
小山田昌行 高坂昌澄 室賀信俊

鷹ヶ巣及びその支流 1,000人 武田信実

← 渡合

寒狭川と三輪川の合流する所を渡合と呼ぶ。左手に見えるのは飯田線の鉄橋、武田軍はここより上流4カ所で渡河した。

長篠の戦史跡案内略図



風来町



数字は 線で示す距離
 単位 700
 昭和36年12月調査
 丸山 杉、松井房夫、竹下敏夫

・おとら狐

城の稲荷様のお使いだった狐を、誰もお祭りせぬようになつたので、おとらという娘にとりついた。娘は片目からやにを出し、片目が悪くなつてびっこをひき、長篠の戦のごとをいくらでもしゃべる。この狐は最近まで多くの人にうけたが、どの人も同じように、片目片目が悪くなり、長篠の戦のことをよくしゃべるようになる。最初におとらについたのでおとら狐というようになった。本丸の土塁にその祠がある。

・蟻塚

追手門趾付近に、蟻封塔がある。ここは戦死者を埋葬した所だが、毎年、大群の蟻が出て、人々を困らせたので、医王寺の住職に頼んで供養をして、蟻を封じてもらつた。それからは蟻は出なくなつた。

・やすら姫の塚

長篠城の東、文化橋付近、前野という所に、一基の塚があつた。見知らぬ娘が、きねを借りに来た。娘は塚の辺で消えて、間もなく、もちをつく音がきこえて来る。そんな事が幾晩もつづいた。



塚を掘りかえして見たら蓋が出て白骨が入つていた。ふたを取ると白骨は白い蝶になつて飛び去つてしまつた。塚の主は、やすら姫といい、長篠の戦の由緒ある落武者の娘であつたという。

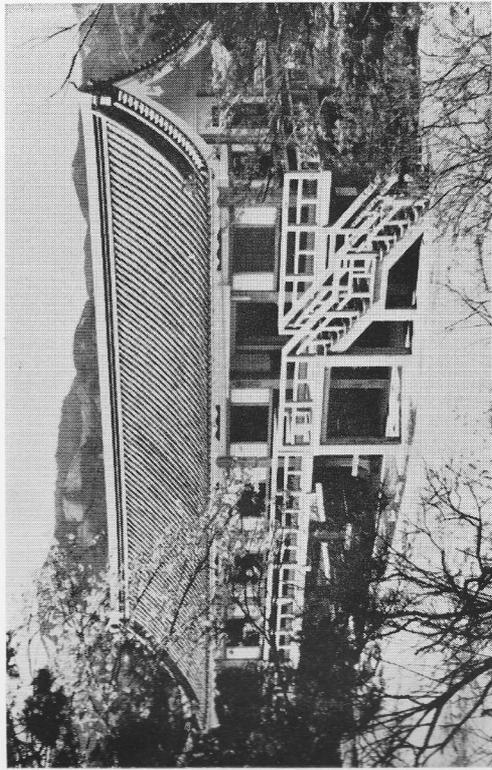
← 片葉のあし

勝頼の本陣跡、医王寺山の麓にある弥陀池のあしは、成長するうちに、片葉になつてしまふ。それは、設楽原出撃の日、勝頼がたわもまれて、あしの葉を切りおとしたかたからだだという。

・さかさ桑

長篠の戦の落武者が、寒狭川の中流にある小松部落にさしかかかつて、民家の庭先に、杖をつきさした。土地の者はその剛力を見て、ただ者でないと思ひ、その杖に手をふれなかつた。落武者は勝頼であつた。その杖からは桑の芽が出たが、下の方だけに伸びるのでさかさ桑という。近年それが枯れたので、土地の人がおしみ、新しいのを長篠城駅構内に植えた。

長篠城跡
史跡保存館



所在地 愛知県鳳来町長篠字市場。飯田線長篠城駅より西南600メートル。

構造 鉄筋コンクリート造2階建 瓦葺 階下 無料休憩所 2階 展示室

面積 延面積 151.90平方メートル、延面積 422.05平方メートル

開館時間 午前8時30分～午後5時

休館日 なし

区分	大人 (高校生以上)	小・中学生
一般料金	50円	30円
団体割引料金(30人以上)	40円	20円

展示 長篠の戦に関する資料が、常時200点、わかり易く展示してある。

保存館の見どころ

廻廊 展望筒——周辺の史跡がわかるようになっている。

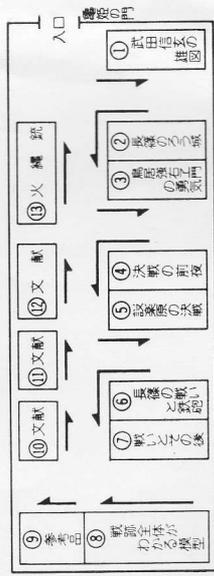
玄関 龜船の門

常書殿——火時計の一種。

第1ケース 武田信玄の遺言状——長篠城内で書きのこされたものと思われる。

第2ケース 血染の陣大鼓——興平貞昌が長篠ろろ城の時使った陣大鼓。

保存館案内図



出土した土弾丸と鉛弾丸。

第7ケース 鷹ヶ巣山付近の旧家に所蔵されていた豊足——武田軍の遺品であろう。

第8ケース 戦跡全体の模型——電燈を点滅させると両軍の配陣がわかる。

第9ケース 甲冑、鉄砲、馬具の解説。

第10～12ケース 長篠の戦に関する書籍類。

第13ケース 火繩銃

第3ケース 鳥居強右衛門はりつけの図——落合左平次の旗指物の模写。

第4ケース 勝頼の本陣で使った茶釜、碗、鉈など。

第5ケース 長篠合戦図——徳川美術館所蔵品のカラー写真。家康の本陣地正山から出土した刀。

第6ケース 火繩銃のいろいろ、および戦場から

写真

表紙——梶村林次氏蔵
火踊り——新城市観光課蔵
その他——編集者蔵

昭和42年6月25日 初版発行
編集者 長篠城趾史跡保存館長 丸山 彰
印刷所 株式会社 水鳥印刷所
発行者 長篠城趾史跡保存館